魏晋における人物批評

A personal criticism of the Wei aud Jin Dynasties

久保卓哉

Takuya KUBO

まえがき

今日でも使われている「度量」「器量」「名器」「才局」などの人物を判定する量目の言葉や、「高尚」「風流」「朗徹」「簡素」などの人物を評目する言葉は、おおむね魏晋時代にその意味付けを完成している。魏晋は現代の我々が継承する文化の出発点であると言える。山水自然を賞し、絵画・書を教養とし、酒を愛し琴の音色に耳を傾け、囲棋に興じて談じ合う。文学は文学として独立の地位を築き「文人」なる呼称が出現する。これらはすべて魏晋の時代に華開いたものであった。この文化の時代である魏晋において人間を見抜くこと人間を評価することは、文化人としての見識であり教養であり又時代の風潮でもあった。

では、魏晋において人物批評が盛んになった背景は何なのか、貴族社会の中でいかに人物評が行われていたのか、評目する評語がいかにして多様化して来たのだろうか。

一、人物批評と九品官人法

魏晋の人物批評の源流が魏晋に先立つ後漢末にあることは既に指摘されている通りであるが、[1] 魏晋の人物批評の盛行を端的に物語るものは人物論の専著『人物志』三巻[2]（魏劉劭撰）が世に出たことであろう。その『人物志』の序で劉劭は、

夫聖賢之所美、莫美乎聰明。聰明之所貴、莫貴乎知人。

と説き起している如く、人を知り人材を挙用して才能を発揮させることは最も天子の頭を悩ませた難題であり政治の関鍵であった。[3] しかも後漢末政治は荒廃の極に達していた。晋の葛洪が、

歴覧前載、逮乎近代、道微俗弊、莫劇漢末也。（抱朴子漢過）

と指摘する如く、政道の衰微・風俗の頽廃は未だかってなかったものであった。官に就くには金がなければ適わず、裁判も正義より賄賂が物を言い、人材の登用は宦官重臣の近習の者に限られ忠賢の士は党人と呼ばれ囚捕誅鋤される。「弘偉大量」だの「公方正直」だの「絶倫之秀」だのともてはやされる者は、その実傲険で懐に毒針を隠し他人の言うままになる者のこと、まさしく後漢末は国家に凶害を及ぼし歴史を汚し石碑に刻む徳音などさらさら無い時代であった。その理由は何か。葛洪は、

夫何哉、失人故也。（抱朴子漢過）

人材を見出し得なかったからであると断言している。

このように劉劭が「知人」を説き葛洪が「失人」を嘆くように、知人の識鑒・人倫の品題は国家の存亡を左右するものであった。

後漢末の郭泰・許劭・符融等の知人の識鑒・人倫品題及び人物評としての「風謡」「謡言」のことは『中国思想通史』（人民出版社一九五七年）に詳しいが、[4] 三国魏の時代になると知人の識鑒の才や人物を品題することにひとつの整理された方向付けがなされて来る。それに先立ってその方向付けをしたのは魏武帝曹操であった。[5] 曹操の事跡を見るに、

曹操微時、常卑辭厚禮、求為己目。許劭鄙其人而不肯對、操乃伺隙脅劭。劭不得已曰「君清平之姦賊、亂世之英雄。」操大悦而去。（後漢書許劭傳）

曹操はまだ駆出しの頃、人物品題の「月旦評」で有名な許劭に自分の評目はどんなものかと求めている。許劭は曹操の人と為りを卑しんで対えなかったところ、曹操は隙を伺い許劭を脅しつけるや無理やり自分の人物評を言わせたという。自己の評目に異常な執着心を見せる曹操は、魏公として軍・政並びに強力なものとしてゆくのであるが、その過程で自らの「知人」の識鑒に照らして門地出生を問わずに人材を挙用し、又自由に郷党の世論に人物の評価をさせその上で評目に適った者を抜擢した。しかもそれは敵国の将兵でもおかまいなしであった。

太祖知人善察、難眩以偽。拔于禁樂進於行陳之間、取張遼徐晃於亡虜之内。

皆佐命立功、列爲名將。其余拔出細微、登爲牧守者、不加勝數。
（魏志武帝紀注引魏書）

今魯肅迎曹操、操當以肅、還附鄉黨、品其名位。（呉志魯肅傳）

そして自分が漢の丞相となるや（建安十三年）部下の崔琰・毛玠に人物の銓衡を任せ選挙に当らせた。[6]

太祖爲司空丞相、毛玠嘗爲東曹掾、與崔琰並典選擧。其所擧用、皆清正之士、雖於時有盛名而行不由本者、終莫得進。（魏志毛玠傳）

崔琰は人物評を好んだ司馬朗と親交が有り自らも人物を見抜く鑒識を備えた人物でその鑒識ぶりが本伝に伝えられているが、曹操が権力を握って以来曹操の下で十余年に渡って人物評価をとりしきった。

崔琰、魏氏初載、委授銓衡、總齊清議、十有餘年。文武羣才、多所明拔。朝廷歸高、天下稱平。（魏志崔琰傳注引先賢行狀）

これによれば人物の銓衡は清議によって評定していたようである。後崔琰は惜しくも無実の罪によって曹操の激情に触れ処刑されるが、この崔琰と共にやはり十有余年に渡って選挙に当った毛玠は、その選抜の的確さによって自然と天下の士をして廉節自励に向けさせる風潮を生み出したため曹操をして「わしは何もする必要がない」（「用人如此、使天下人自治、吾復何爲哉。」魏志毛玠傳）と感激させたほどであった。崔琰・毛玠は共に丞相の掾属になって五年後尚書僕射及び尚書に昇格して選挙を典っている。[7]

このようにして曹操は、或は郷党に人物品題をさせた上で人材を選任挙用し、或は部下の崔琰・毛玠を選挙の専任とし、選挙に当っては清議によって人物の銓衡を行うということを実施していたのである。

そして人物品題と選挙は単に魏の国内のみのことではなかった。呉の歩隲はその徳度と規検で当世に名を馳せた名臣だが、ある時孫権の太子孫登が自分に自信を持てないところから君子たる資格とはどんなものかと尋ねたことがあった。その時歩隲は当地荊州の錚々たる人物十一人を並べあげてその行状を品評し、太子として何をなすべきか諭して励ました。

歩隲于是條于時業在荊州界者、諸葛瑾陸遜朱然程普潘濬裴玄夏侯承衛旌李肅周條石幹十一人、甄別行狀、因上疏奬勸曰、……（呉志歩隲傳）

この十一人の一人李粛は、

少以才聞、善論議、臧否得中、甄奇録異、薦述後進、題目品藻、曲有條貫、衆人以此服之。孫権以爲選曹尚書、選擧號爲得才。（呉志歩隲傳注引呉書）

論議をよくするとともに人物評を好み後進の若者を薦述するその人物品題は、あやがある上に筋道が通っており衆人を感服させるものであった。後選挙を担当する選曹尚書に就いて「やっと才能が発揮できる」と人々にもてはやされた知人の識鑒であった。[8] また孫権の輔弼顧雍は丞相の職で選挙を兼務し、選用した文武の将吏はすべて才能通りで彼らに何の不満も抱かせず、また時には民間の中に訪問して政職の評判を密かに聞いて回ったという。（呉志顧雍傳）　その長子である顧邵は、「好尚人物」「好楽人倫」の士で好んで人物評をした。

自州郡庶幾及四方人事、往來相見、或諷議而去、或結友而別。風聲流聞、遠近稱之。（呉志顧邵傳）

その対象は州郡の賢者から天下の人士に及び途中で人に出会うと或はそれとなく諷して去り或は友となって別れ、その風評名声は遠近の人々の称する所で事実微賤の庶民丁謂等四人の才能を見抜いて親交を結ぶと、果して後四人とも太守や太子少傅に出世したため、世間では「世以邵爲知人」（本傳）とその知人ぶりを称した。こうした時呉の地へ蜀の「雅好人流」「性好人倫」の士、龐統がやって来た。龐統は諸葛亮に次ぐ先主劉備の軍将でこの時はまだ南郡太守の功曹であったが、先主を助けた功績で南郡太守として遇されていた呉の周瑜が亡くなったため部下として葬儀の参列にやって来たのであった。呉の人々はその名声を聞き及んでいてまさに蜀に還ろうとする時、呉の顧邵や陸績・全琮が訪ねて行った。龐統は三人を見るや評して言った。「陸子は所謂る駑馬だが、足が速いという取り柄がある。顧子は所謂る駑牛だが、重い荷物を背負って遠くに行くことができる。全子は名声欲が強く汝南の樊子昭に似ている。智力は多くないとはいえまた当代の佳士である。」顧邵と陸績はそれを聞いて感心し「あなたと一緒に四海の人士について人物批評をしてみたいものだ」と申し入れている。この時顧邵は龐統と夜通し語り明かしたらしく、自分の人物眼と龐統の人物眼とどちらが上かとその品評を請うている。（蜀志龐統傳・世説品藻）

このように当時、魏のみならず呉蜀の地においても人物批評と品題による銓衡は行われていたのである。こうした全土に及ぶ汎がりを背景にして、曹操の死より幾月も経たずして尚書陳群の建議により「九品官人之法」が制定された。（魏志陳羣傳）

九品官人法についてはすぐれた研究がなされている[9]のでここに改めて述べない

が、九品官人法とは「士大夫社会に行はれてゐた清議や月旦評を、公認し法制化したと見られる」（「六朝士大夫の精神」森三樹三郎八頁）ものであり、また制度的には「地方の郡国に夫々中正なる職を設け、管内の人物につき郷里の評判を参酌して一品から九品までの等級をつけて政府へ上申し、政府はこの上申の品級に従って任命する」（「九品官人法の研究」宮崎市定九四頁）というものであった。この九品官人法が魏文帝の即位より以前に魏朝の方針として確立し即位とともに国制として完全実施されたことは、時の士大夫にとって一大事であった。なにしろ評判の善悪が官品の高低を決定する強力な根拠となる。いわゆる「正始の音」の清談の黄金時代以来晋代に入っても清談による社交的貴族が隆盛して六朝文化を高めたのは、清談で社交界に活躍すれば中正による郷品の上品が獲られるからであった。しかも清談において社交界からもてはやされるためには、老荘の玄学のみならず儒学史学文学に精通し絵画書音楽彫刻から囲棋に至るまでの幅広い教養が必要であった。貴族社会に投ぜられた九品官人法の波紋が次第に同心円の輪を広げるように、六朝文化を開華させて行ったのである。

九品官人法が及ぼした影響が教養としての文化を発展させたことにあるのもさることながら、人物批評の上でより重要な意味を持つのは制度そのものが人物評を義務付けていたことにある。つまり地方の郡国の中正官はその郡郷内の人物を中央に推挙する際、九等の「郷品」とそれに加えて人物の才能性格態度等を述べる人物寸評とも言うべき「状」を合せて申し送るのが常であった。

魏初、九品が始めて制度化し郡国に中正が置かれた頃、馮翊郡に書を好み悪衣悪食は恥としないが一物として知らない物があれば恥とする吉茂なる人物が居た。この吉茂は同郡に中正として赴任して来た王嘉に「郷品」としては上第をつけられながら、「状」は甚だ低評の「徳優れども、能少なし」との評目をつけられたため頗る不満であったという。

王嘉時還爲散騎郎、馮翊郡移嘉爲中正。嘉叙吉茂雖在上第、而狀甚下、云「徳優能少」茂慍曰「痛乎、我效汝父子冠幘劫人邪」[10]　（魏志常林傳注引魏略）

西晋の初、同郷の孫楚と王済は共に親交があった。王済は易老荘を好み文詞伎芸に秀で清言をよくする当時の代表的貴族であったが、孫楚は才能に富みながら豪気で人に下らず歳四十余にして始めて鎮東軍事に就いたほどの自負心の強さを持っていた。二人は若い頃から隠遁の志について語り合い、又孫楚の詩を王済が批評したり土地人物の美を評し合ったりした間であった。その王済が郷里の州大中正（郡中正を監督）の時、部下の訪問（郡中正の部下）が孫楚の「品状」について判断を求めたことがあった。その時王済は「この人物はとても君たちが評言できる人物ではない」と言って自ら孫楚の「品状」を書き、その人物評を「天才英博・亮抜不羣」と認めた。

孫楚郷人王濟、豪俊公子也。爲本州大中正。訪問關求楚品狀。濟曰「此人非卿所能名」自狀之曰「天才英博、亮抜不羣」　（魏志孫資傳注引晉陽秋）

王済のこの孫楚評はまことに抽象的で文学的である。老荘を好み清談をよくし文詞伎芸に秀でた代表的貴族王済のつけた評であるからかくも文学的抽象的になったのだと思われるが、こうした評言は以下に挙げる例の如く六朝を通じて見られるようになる。

州郡中正による官吏資格授与の為の人物所見たる人物評のみならず、中央政府においても官吏の任免黜陟を行う尚書が任官の際には人物に評目をつけていた。魏高貴郷公の世、晋文王（司馬昭）は大将軍の位に進み録尚書事として尚書を統轄していたが、その時管内の吏部郎に欠員ができ人材を補充しなければならなくなったため、鍾会に適材人物を尋ねたことがあった。

吏部郎闕、文帝問其人於鍾會。會曰「裴楷清通、王戎簡要、皆其選也。」　（世説賞譽）

鍾会は裴楷と王戎を推薦し、二人を評して、裴楷は「清通」王戎は「簡要」な人物で従って共に適任と述べている。この鍾会が下した人物評もまことに抽象的である。ちなみに鍾会は博学にして名理に精練し談論の主題たる『才性四本論』を著わして嵇康にその批評を請い、又正始の音の代表王弼と並称された人物であった。

西晋武帝の時代、十有余年にわたって吏部尚書・尚書僕射として人物銓衡に当ったのは竹林七賢の一人山濤であった[11]。山濤は、

山司徒前後選、殆周遍百官、舉無失才。凡所題目、皆如其言。　（世説政治）

殆ど百官のすべてにわたって選官に当り、人材を見誤ることなくしかも推挙の際につけた人物評はすべてその言葉通りに正しいものであったという。彼が推挙の際につけて上奏した人物評は当時『山公啓事』と称され、今もその断片が残っている。

濤所奏甄拔人物、各爲題目、時稱山公啓事。　（晋書山濤傳）

山公啓事　三卷[12]　（隋志総集類）

『山公啓事』によって中央政府における選官と人物評目を見てみるに、

山濤啓事曰、吏部郎史曜出處缺、當選、濤薦阮咸曰「眞素寡欲、深識清濁、萬物不能移也。若在官人之職、必妙絶於時。」詔用陸亮。（世説賞譽注引）

吏部郎（官吏の選任を扱う、官位高くないが重要職）の史曜[13]が職を去って欠員となった時山濤は阮咸を推薦した。その阮咸評は「眞素寡欲、深識清濁」、嗜欲少なく清濁わきまえ生き方が率直であるという。阮咸は阮籍の兄の子で、阮籍と共に竹林七賢の一人。その任誕ぶりは有名で酒に耽り音楽を解し、更には愛する鮮卑の侍女が去って行く時母の喪中でありながら喪服のまま追いかけて連れ戻し妻にしたほどであった。当時の人々は皆彼のすることを訝しんだが、しかし彼と一緒にいてみるといかにも嗜欲が少なく自由奔放なので皆それまでの批判を忘れたという。山濤はこの阮咸の真情を十分見抜いた上で、しかも武帝が任用しないことは最初から分っていながら彼を推挙したのである。果して武帝は「耽酒浮虚」の理由で阮咸を用いず陸亮を任用した。（世説賞譽注引竹林七賢論及晉陽秋）

この時、阮咸を推す山濤と陸亮を推す賈充との間で論争があったようである。賈充はそれまでも自分より位は低い山濤と意見が対立し自分の思うように選挙に当れなかったため、腹心の陸亮を部下に採用して対立した時は味方にしようと考えていた。山濤は賈充の推す陸亮は左丞相にこそすべきで選官の才などないと主張したが、結局阮咸の任誕が禍いして帝は陸亮を採用したのである。しかし陸亮は後収賄の事件を起し免官になっている。（世説政事注引晉諸公贊）　この吏部郎に不採用になった頃の阮咸をであろう、一目見て心酔し思わず嘆服したのが郭奕であった。郭奕もまた山濤によって侍中に推薦されている。

山濤爲吏部尚書十有餘年、每官缺、輒啓擬數人。曰、「侍中彭權遷、當選代。按雍州刺史郭奕、高簡有雅量、在兵閒少、不盡下情、處朝廷、足以肅正左右。右衛將軍王濟、才高茂美、後來之冠、此二人誠顧問之秀、聖意儻惜濟、貴之。」[14]（通典選擧二）

この場合侍中に二人を同時に推薦している。雍州刺史の郭奕と右衛将軍の王済は共に第四品。侍中は第三品であるから昇格である。「高簡有雅量」の郭奕と「才高茂美」の王済と甲乙つけ難い二人を推薦して武帝の裁定を仰いだのである。侍中にはこの時州大中正として孫楚の品状を自らつけた王済が選ばれている。郭はやはり第三品に昇格して尚書に任用された。更に嵇紹を推薦して、

山公啓事曰、詔選秘書丞。濤薦曰「嵇紹平簡温敏、有文思、又曉音、當成濟也、猶宜先作秘書郎。」詔曰「紹如此、便可爲丞、不足復爲郎也。」[15]（世説政事注引）

嵇紹は嵇康の子である。秘書丞（第六品）は宮中の図書を典る。特に後の南朝では天下第一の清官と称せられ、秘書丞になればその家は一流の貴族であることの証拠とされた官である。（「九品官人法の研究」三二〇頁）　その秘書丞を選べとの詔が出た。山濤は嵇康の遺児をそれでも秘書丞よりは一段低い秘書郎にと控え目に推薦した。「平簡温敏」にして文才があり又音楽にも通じているから秘書官として十分なしおおせる人物だと。なぜ直接秘書丞に推挙せずに一段低位の秘書郎に推薦したのか。それは嵇紹の父嵇康は武帝の父君晉文王（司馬昭）の権力の下に誅殺されたため山濤はその遺児を武帝に対して推挙し難かったからであり、又自分に帝の憤激が飛んで来るのを憚ったためであろう。しかし武帝はそれほどの人物ならすぐにも丞にすべきで郎にしておく必要はないと詔して、丞として任用した。嵇紹にとっては初めての推挙であり任官であった。時に二十八才、父嵇康の事件より二十年が経っていた。内定の通知があってどうすべきかその進退を決めかねていた、出任しても周囲から受け容れられるかどうか不安であったからである。山濤は時に七十七才。「君のために長い間考えていた事だよ」と父の刑死にこだわる必要はないことを諭した。嵇紹は秘書丞から徐州刺史（第四品）を経て散騎常侍・侍中（第三品）を歴任し、忠義列傳に名を列ねている。

『山公啓事』は竹林七賢の一人として魏晉の世に生き七十八才の長寿を全うした山濤の人事銓衡記であり、政府部内における人事にまつわる様々な人間模様を投影している。そお全貌は断片が伝わるのみであることから明らかではないが、

。官職に欠員が出た場合その補塡人事について山濤が携わった記録であること

。欠員が出た官職はいかなる職務内容かを記し推挙する人物の人物評と推挙理由を添えて朝廷に上奏し、天子の判断によって決定された人事の結果を天子の詔として末尾に記載する形式を持つこと　。山濤の死の直前までを内容として有つこと　。評語は六朝に特徴的な抽象的難解な語彙と古来の儒風精神による評語が混在すること　。古くは賈弼注・裴津注の三巻本・十巻本が流伝したこと

等が考えられよう。

以上のように、魏晉における人物批評は九品官人法制定による人物評の制度化を契機として隆盛し、士大夫に官吏への道という一つの緊張を与えながら盛行して来たのである。

二、人物批評と清談

魏晋の人物批評が選挙制度と密切な関係があることを述べて来たが、その際に気付いたことは魏初の人物評が「德優能少」（前述王嘉の人物品状）の如く分り易いのに比べ魏の中期を過ぎると「清通」「簡要」（鍾会）「亮拔不羣」（王済）「眞素寡欲、深識清濁」「高簡雅量」「平簡温敏」（山濤）の如く表現が抽象的で評語の中に意味が凝縮されており難解になって来ていることである。これは何を意味するのか。

魏初の人物評が分り易いのは、国家の草創期という政治的な背景が関係する。つまり国家建設・政権安定のために必要なのは「倹節」「清正」「貞実」「遜行」の人物であった。

其選用、先尚倹節。（魏志和洽傳）

其舉用、倹皆清正之士。（魏志毛玠傳）

毛玠、其典選舉、拔貞實、斥華僞、進遜行、抑阿黨。（同注引先賢行狀）

古来の儒教的な経国済民の士が嘱望されたのである。時の散騎常侍王象が魏文帝に上申して楊俊を推薦したことばはそれを物語っている。

文帝踐阼、復在南陽。時王象爲散騎常侍、薦俊曰「伏見南陽太守楊俊、秉純粹之茂質、履忠肅之弘量、體仁足以育物、篤實足以動衆、克長後進、恵訓不倦、外寛内直、仁而有斷。」（魏志楊俊傳）

難解になるのは、草創期を経て国家が安定して来ると貴族化が進みより幅広い才能と教養が必要になり国家及び社会が要求する士大夫への価値観が多様化して来たこと、つまり文化的な背景がそれ以後の人物評を抽象的多彩なものにしたのと関係する。とりわけ正始年間王弼・何晏を代表とする玄妙虚勝を言う「正始の音」は以後の人物評に大きく影響し、より哲学的抽象的難解なものにしたと言えよう。先に挙げた鍾会の「裴楷清通、王戎簡要」の評などはその例である。鍾会は正始の音の代表王弼より一歳年長であり若きより王弼と共に世に名を知られ互いに論を戦わした間柄であった。（魏志鍾會傳及注引王弼傳）[16]

こうしたことに突き当ってみると人物評と清談とは深い関係があることに気付く。魏晋の清談に関して、その起源、名題による清談家各派の分析、その実態等の考察は先学の業績に負うとして[17]、では人物評語の多彩化と清談との関係の実態はどのようであったのだろうか、また人物評の隆盛はどのような様相を見せているのであろうか。

清談は一人で行うものではなくそこには同程度の教養と見識を持った複数以上の人士が存在し、従って彼らが集まるだけの会合場所が存在していた。竹林の七賢の集まりはとみに有名だが、この会合の風も後漢末に始まり魏晋において隆盛する。後漢末、その家に通されれば龍門に登ったと見なされたという登龍門で有名な李膺の邸宅には太学游士が多数集まっていた。その太学生のリーダーが人物品題で有名な郭泰・符融であり（後漢書郭泰傳符融傳）、又建安七子の一人孔融はここで十才余りにして初めて認められたのであった。（魏志孔融伝注引續漢書）

魏初においては、瑯邪太守単子春の邸宅では賓客百余人にのぼる大会合が開かれ能言の士が集まっていた。易占で有名になった管輅は十五才の時その会合に招かれ、衆士と論難攻劫し神童の號を得ている。（魏志管輅傳注引輅別傳）　正始年間何晏は地位も名望も高く談客は坐に満ちていた。未だ弱冠ならざる時王弼は出かけて面会し満座の談客の前でその談論の卓越した所を見せている。（世説文學）

西晋においては、巨万の資産を誇り多数の文人を金谷園に招いて詩を作らせた石崇とともに豪奢で有名なのは、孫楚の人物品状を自らつけた貴公子王済である。武帝が自ら臨幸したという豪邸の馬場は銭を敷きつめていたために金溝と呼ばれたほどだが、その王済は孫楚とそれぞれ自分の土地や人物のよさを批評し合っている。（世説汰侈言語）　又西晋の武帝は時の談遊貴族たちを宮廷に招いて伎芸の事を話題に談論している。（世説豪爽）　東晋においては蘭亭の会が有名で、王羲之・謝安・謝尚・孫綽・李充・許詢・支遁等は会稽の蘭亭において清談と賦詩の宴集を催しており（世説企羨注引王羲之臨河叙）、又会稽王時代の簡文帝の邸宅には当時の一流の名士謝安・王濛・劉惔・殷浩・許詢・孫盛・支遁・竺法深などが常に集まっており清談家のサロンを代表するものであった。[18]（世説文學賞品藻容止）　こうした会合の場では清談が盛んに行われ文学を論じ人物を批評し合い詩を賦し伎芸論をぶつけ合っていた。

このような会合での人物評を見てゆくと、

諸名士共至洛水戯。還、樂令問王夷甫曰「今日戯樂乎。」王曰「裴僕射善談名理、混混有雅致。張茂先論史漢、靡靡可聽。我與王安豊説延陵子房、亦超超玄著。」（世説言語）

西晋の世、時の談論家楽広・王衍・裴頠・張華・王戎たちは洛水のほとりに出かけて清談をして遊んだ。その時の題目は名理の談論・『史記』『漢書』について、及び歴史上の人物延陵季札と張良子房の比較論であった。洛水のほとりから帰って来て、今日の遊びはどうであったか楽広と王衍の間で各人の談論ぶりを批

評し合っている。王衍は各人の談論がそれぞれ「混混有雅致」「靡靡可聽」「超超玄著」であったと批評する。実際の清談による遊びと、その清談ぶりを批評するという二重の楽しみ方をしている。ここには選挙のためといった堅苦しさは無く貴族のサロンを構成する遊びの精神があるのみである。こうした遊びの精神は東晋になると益々顕著になる。

劉丹陽王長史在瓦官寺集、桓護軍亦在坐、共商略西朝及江左人物。或問「杜弘治何如衛虎。」桓答曰「弘治膚清、衛虎奕奕神令。」王劉善其言。

（世説品藻）

仏教の隆盛を反映して会合場所は瓦官寺である。[19] 瓦官寺はしばしば清談の場として登場するがその瓦官寺に劉惔・王濛・桓伊が集まって西晋と東晋の人物について品評した。美男として有名な杜乂（東晋）と衛玠（西晋）を比べてどうか。同座の桓伊は、杜乂は「膚清」衛玠は「奕奕神令」と即評する。王濛・劉惔はその批評に感心した。容止篇に引く『江左名士傳』では劉惔・謝尚が出席した座で同じように「杜乂は清標令上、後來の美たり。又面は凝脂の如く、眼は點漆の如し。ほぼ衛玠に方ぶるを得べし。」と杜乂・衛玠二人の容姿を比較している。ここには政治や世務の実務的な仕事から超越した貴族達の楽しい遊びの姿のみが見られる。[20] 同じく東晋の世のことである、

庾亮周顗桓彝一代名士、一見和尚、披衿致契。曾爲和尚作目、久之未得。有云「尸黎密可稱卓朗」於是桓始咨嗟、以爲標之極。（世説賞譽注引高座傳）

高座道人帛尸黎密は中国語を話さない西域の僧。西晋永嘉年間に初めてやって来て以来その威風堂々たる風格は当時の人々に旋風を巻き興し多大の興味を覚えさせた。一代の錚々たる名士庾亮・周顗・桓彝等はその高坐道人に人物評をつけようとした。誰もが納得する人物評語でなければならない。しかしなかなかできない。そのうち座中の一人が「卓朗」と言えようと評目をつけた。この「卓朗」はまさしく満座を唸らせる評目であった。桓彝はこれこそ標目の極だと感嘆する。この話は人物批評の流れの中で特に重要である。なぜならば高座道人という言い知れぬ風格を持つ人物の微妙な風趣を、より的確にぴったりとした評目をつけて表現しようと心を砕き、しかもそれを競争し合っているからである。そこにはやはり選挙任用のための人物評のような堅苦しさはない。醸し出す雰囲気のより微妙な趣きをいかに正確に表現するかが問題なのである。こうした微妙な感覚は後漢末の人物評には見られなかったものである。微妙な趣きを追求する感覚は、魏晋の人物評において初めて見られるようになった。[21] この感覚が老荘の玄妙虚勝を言う正始の音による清談と晋朝における仏教の受容と相俟って「清通」「簡要」「高簡雅量」「亮拔不羣」「奕奕神令」「超超玄著」「清標令上」「卓朗」の如き、又「風骨・風標・風韻・風神・風期・風領・風操・風穎・風概・風績・風器・風鑒・風色・風飈・風姿・風宇」「開朗・開濟・開率・開豁・開悟・開曠・開脂・開爽・開達・開美・開拔・開敏」「天骨・骨幹・風骨・正骨・骨氣・壯骨・毛骨・氣骨・奇骨」「才局・意局・志局・識局・智局・局量・局陳・局幹・局鎮」「器量・良器・名器・器明・器望・器識・才器・風器・器度・體器・器素・成器・器賞・器重・弘器・器業・器愛」「高韻・思韻・志韻・大韻・天韻・韻度・風韻」「高朗・開朗・散朗・疏朗・清朗・爽朗・通朗・標朗・敏朗・朗拔・朗越・英朗・朗儁・朗贍・潛朗・朗悟・朗達・朗鑒・徹朗・秀朗・聰朗・朗徹」の如き評語を生み出したのである。[22]

三、人物批評の盛行・人物伝と世時の関心

しかしながら人物評は単に清談の座の中でのみ行われたのではない。いかに当時にあって人物を評する風が広く浸透していたか。それは魏晋において『海内士品録』魏文帝撰・『海内先賢傳』魏明帝時撰・『汝南先賢傳』魏周斐撰・『會稽先賢傳』呉謝承撰・『高士傳』『逸士傳』西晋皇甫謐撰・『名士傳』東晋袁宏撰・『逸人高士傳』東晋習鑿齒撰・『何晏別傳』『荀彧別傳』『衛玠別傳』『高座別傳』などの人物伝が多数著わされていることからうかがえる。『世説新語』や『三國志』の注に引かれたこれらの人物伝は『隋志』や『唐志』の時代に既に散逸してその半分すら載録されておらず、清姚振宗の『三國藝文志』文廷式の『補晋書藝文志』（二十五史補篇収）によってその全容を知るほかないが、こうした人物伝が郷土別に個人別にそして年代別に多数著わされたことはそのまま人物と人物を評することへの関心がいかに高いものであったかを物語るものである。その中で『語林』と『漢晋春秋』について見るに、『隋志』に、「語林十巻　東晋處士裴啓撰亡」と記す『語林』の著者裴啓は、若い時から風姿すぐれて才気があり好んで古今の人物を論じていた。その彼が漢魏以来今日に至るまでの言語応対のすぐれたものを選択収集して『語林』十巻をものにしたのは、東晋隆和年間（三六二～三六三）であった。時恰も人々はそうした事を好んだため忽ちのうちに流行し、当時の若者たちは競い合って『語林』のコピーを作りそれぞれが一本を持

つというほどであった。[23]（世説文學輕詆及注）『語林』の内容は、「王濛が劉惔に向かって言った。『あなたは近頃随分成長したね』劉惔が言った。『あなたは仰いで見ますか』王濛がその意味を問うと、劉惔が言った。『でなければどうして天の高さが測れましょう』」（世説言語注引語林）といった機知に富んだやりとりを採録し、或は「有人目杜弘治『標鮮甚清令、初若熙怡、容無韻非、盛德之風、可樂詠也。』」（世説賞譽注引語林）といった人物批評語を収めたものであった。又『隋志』に「漢晋陽秋四十七巻　訖愍帝　晋滎陽太守習鑿齒撰」と記す『漢晋春秋』[24]の著者習鑿齒は病を押して四十七巻を完成させたというが、原来史学の才能が非凡で文筆によって頭角を見わした才能豊かな人物であった。また楚国出身である習鑿齒は青州出身の伏滔とそれぞれの郷土である青楚の人物を論じ合ってもいる。『世説新語』文学篇にはその著『漢晋春秋』における習鑿齒の人物批評は抜群のものであったと記載されているが、『漢晋春秋』における習鑿齒の人物評とは、その「庾翼傳」の「翼風儀美劭、才能豐贍、少有經緯大畧。…」（世説豪爽注引漢晋春秋）の如き庾翼の為人を髣髴とさせる評語の的確さ、及び「傳嘏傳」の「嘏固勸景王行、景王未從、嘏重言曰『淮楚兵勁、而倹等負力遠鬬、其鋒未易當也。若諸將戰有利鈍、大勢一失、則公事敏矣。』是時景王新割目瘤、創甚、聞嘏言、蹶然而起、曰『我請輿疾而東』」（魏志傳嘏傳注引漢晋春秋）の如き毋丘倹の乱に対して討伐の兵を挙げるべきだと勧告する傳嘏の緊迫感溢れの言動と、それを聞いて飛び上って驚く司馬景王の折しも目の上のおできを切開した痛みによってなかなか腰を上げようとしなかった様子などを生き生きと描写していることを言うのであろう。『世説新語』にはこの他、袁宏の『名士傳』（「名士傳三巻　袁宏撰」舊唐志）の完成を知って謝安が「わしの冗談をそのまま書物にしてしまった」と笑った話、及び康法暢の『人物始義論』が存在したことを伝えている。

ともあれ人物伝が世に出ると人々は高い関心を示し争って読むという有様であった。そのため著者は古今の人物の言動を緊迫感を持って表現し、又その人物像を生けるが如く描写することに全力を傾けたのである。

一方人物及び人物批評に対する世間の高い関心は、こうした一史家の人物評をもてはやすことにのみならず時人・世間それ自体が人物に対して評目をつけていた事にも見ることができる。魏の竹林七賢の呼称は、竹林のもとに集まって心ゆくままに酒を飲み交遊する七人に対して時の世がつけたものであった。四聰八達の一人夏侯玄の立派な風姿を李豊のそれと比べて評したのも時の人々であった。

時人目「夏侯太初朗朗如日月之入懐、李安國頽唐如玉山之將崩」[25]（世説容止）

西晋の世、潘岳と夏侯湛はともに容貌が美しくよく連立って歩いたため当時の人々は「連璧」と評している。

潘安仁夏侯湛並有美容、喜同行。時人謂之「連璧」（世説容止）

裴楷は人よりすぐれた容姿を具え冠を脱ぎ平服で髪が乱れていてもなお美しかったため、当時の人々は光輝く「玉人」だと評した。

裴令公有儁容儀、脱冠冕、麤服、亂頭、皆好。時人以爲「玉人」（世説容止）

『荘子』を繙いて一尺ばかり読んだだけでわしの考えと少しも違わないと言ってのけた庾敳は王衍・裴楷・庾亮らと親交のあった清談家であるが、その処世態度も見事であった。

時人目庾中郎「善於託大、長於自藏」（世説賞譽）

『崇有論』を著わし王衍・楽広・張華らと清談の遊びを行った裴頠は、その理論と論難の才の豊かさによって時の人々から「談論の林藪」であると評された。

裴僕射、時人謂爲「言談之林藪」（世説賞譽）

西晋武帝の世中書監にまでなった荀勗は、音楽に関して卓越した理解力があり雅楽を正し宮商律呂の音階を調整するほどであった。一方阮咸は音楽のすぐれた鑑賞家で、荀勗の調律によって演奏される雅楽が心中音階に適っていないと見抜いていたが、しかし一言も口に出しては言わなかった。後農夫が周代の玉尺を発見して天下の標準尺が出土した時、荀勗が自分の調律した楽器の一つ一つを測定し直してみたところ皆黍粒一つ分だけ短いことに気付いた。そこで初めて阮咸の神事的な洞察力に感服した。当時の人々は荀勗を「闇解」、阮咸を「神解」と評したという。

荀勗善解音聲、時論謂之「闇解」……阮咸妙賞、時謂「神解」（世説術解）

東晋になって、東晋初の世論は温嶠を第二流の上位であると評価していたため、時の名輩が集まって人物批評をして第一流の人物の名が終りに近づくと温嶠はいつも色を失った。

世論温太眞是過江第二流之高者。時名輩共説人物、第一將盡之間、温常失色。（世説品藻）

東晋初の習慣に、任官されると食事を振舞う習わしがあった。羊曼が丹陽尹に任命された時は食事は一度出せば出し放しで遅く来た客は美味いものにありつけな

いという道理で客の身分の貴賤に関係なかったが、羊固が臨海太守を拝命した時は一日中立派な食事を提供し遅く行ってもご馳走にありつけた。時評は、羊固の豪華さは羊曼の「真率」には及ばないという評価を下した。

時論以固之豊華、不如曼之真率。　（世説雅量）

八才で既に談論の上流に数えられた謝尚は王導・殷浩・王濛・桓温とともに三更に及ぶ清談を展開して正始の音再現の場を作った一人であるが、その謝尚を世間では「令達」と評し、阮孚（阮咸の子）を「清暢にして達に似たり」と評した。

世目謝尚為「令達」、阮遙集云「清暢似達」　（世説賞譽）

若い頃の謝安に『白馬論』を教えたほどの阮裕は、当時の人々から「骨気は王羲之に及ばず、簡秀は劉惔に及ばず、韶潤さは王濛に及ばず、思致の点では殷浩に及ばないが、これらの人々の美点を兼備している。」との評価を得ていた。

時人道阮思曠「骨氣不及右軍、簡秀不如眞長、韶潤不如仲祖、思致不如淵源、而兼有諸人之美。」　（世説品藻）

更にはまた西晉の王澄のように、名士達から人物題目の名人、その権威者と目された者まで存在し、

王夷甫語樂令「名士無多人、故當容平子知。」　（世説賞譽）

澄風韻邁達、志氣不羣。從兄戎、兄夷甫、名冠當年。四海人士、一為澄所題目則二兄不復措意、云「已經平子」其見重如此。　（同注引王澄別傳）

東晉の王珉のように、古今の史実や人物氏族の来歴を諳んじている者まで出現して、折しも建康の都に臣属して来た前涼最後の天子張天錫をしてさすがに東晉の都の士大夫だと驚嘆させている。

張天錫見其風神清令、言話如流、陳説古今、無不貫悉。又諳人物氏族、中來皆有證據。天錫訝服。　（世説賞譽）

世間と時人の評目が人物の才能・容姿・談論の妙・処世態度・音楽鑑賞・ランク付けにまで及び古今の人物氏族の来歴を暗誦している王珉のような者まで存在したことは、いかに人物論及び人物批評が時世に隆盛していたかを物語り又世間全体の人物批評の質の高さを意味する。こうした背景を考えると、人物評の正確さを競い描写の妙を競う微妙な感覚が生まれるのも当然のこととであった。

むすび

以上要するに、魏晉における人物批評は、曹操の人材挙用のための人物評採取の実績を経て、魏初九品官人法が制定されたことによって人物に評目をつけることが制度として確立し、人物批評が広く社会に定着することになるという選挙制度上の背景を起因として盛行した。高評目が高位任官に直結する事実は魏晉の士大夫を社交界で名を挙げるための行動に走らせ、時恰も貴族社会に流行していた清談を益々盛んなものにした。その清談の題目に玄妙・名理の談論・詩賦の文学論とともに人物を論ずる人物批評があり、人物批評は清談の集まりの中で隆盛することになるが清談が次第に社交生活の場での教養としての遊びの色合いを深めたために人物批評に堅苦しさはなくなり、微妙な所まで正確に表現するようになって評語は一挙に多彩になり従ってまた難解になるという現実を生むようになった。こうした人物批評盛行の事由を背景に「清通」「清標」「神令」「令上」「簡要」「高簡」「雅量」「局量」「卓朗」「散朗」「真率」「開美」「骨気」「毛骨」「風韻」「風令」「天韻」「才局」「通達」等の人物評語が生まれたのである。

付記

右に挙げた六朝に特徴的な人物評語については次の機会に報告する予定である。本稿作成にあたり、雑誌掲載関係論文の文献複写については本校図書館にお世話を戴いた。記して感謝の意を表したい。

注

① 「魏晉南北朝通史」外篇魏晉間思想の転移（其一）　岡崎文夫　「支那文学思想史」外篇清談　青木正児　「人物志の流伝について――支那中古人物論の本質解明への一試論――」岡村繁（哲学3　昭和27年）「郭泰・許劭の人物評論」岡村繁（東方学10　昭和29年）「後漢末期の『談論』について」期波六郎（広島大学文学部紀要8号　昭和30年）「中国思想通史」第二巻第十章漢末統治階級的内訌与清議思想　侯外廬・趙紀彬・杜国庠・郁漢生著（人民出版社　1957年）「後漢末期の評論的気風について」岡村繁（名古屋大学文学部研究論集文学22　1960年）等の業績がある。なお「中国思想通史」は、魏晉の清談及び識鑒品題の風はすべて後漢末の郭泰が既に行っていたことであり郭泰こそがその祖であると断言している。（第

二巻第四節四一〇頁）

② 『人物志』に関しては、前掲岡村繁「人物志の流伝について」及び「人物志劉注校箋」（名古屋大学文学部研究論集文学9　1961年）　多田狷介「『人物志』訳稿上・下」（史艸20　21　1979, 1980年）がある。なお前掲「郭泰・許劭の人物評論」の中で岡村繁氏は、後漢の郭泰に人物鑒識を論じた中国最初の専著一巻があったことを指摘しておられる。多田狷介氏の「訳稿」は翻訳としては最初のものである。

③ 人物選定の重要さは古く『尚書』皐陶謨に、「皐陶曰く、都、人を知るに在り、民を安んずるに在りと。禹曰く、吁、咸に時のごときは、帝と惟も其ほこれを難しとす。人を知るは則ち哲にして、能く人を官すと。」と説く。梁の任昉は、人物選定は帝堯でさえ難しとした事で漢魏晋には称すべき者として許劭・郭泰・毛玠・山濤が居るだけだ、と述べている。（「爲范尚書讓吏部封侯第一表」文選巻三十八）又楊家駱氏は「人物志研究序」で古来経史に見える知人の流れを、『逸周書』の「官人解」には人の誠・志・声・色・隠・徳の徴しを観察して官材の挙用をすべきことを述べていること、「哀公問五義」には庸人・士人・君子・賢人・聖人の別を言い、『呂氏春秋』の「季春記」論人には八観・六験・六戚・四隠の論があること、両漢には『韓詩外傳』『淮南子』『法言』『論衡』などの書があり才を論じ人を観察することを論じ、これが魏の劉劭の『人物志』へと続いてゆく、とその経過を述べている。

④ 「中国思想通史」の第二巻第十章二節太学生与郡国学生的〝浮華〟〝交会〟第四節党錮始末与清議的転向　参照。なお郭泰・符融等後漢末の人倫識鑒の士については前掲岡村論文、風謡については「後漢における七言の人物評語」今鷹真（名古屋大学文学部三十周年記念論集）がある。

⑤ 九品官人法の起源について宮川尚志氏は「六朝史研究政治社会篇」で、汪士鐸の「建安に始る」との説を引き、「即ち九品中正制の精神は曹操より発し曹丕に至って実現し、魏国の政策として用いられたものではないか。」（二六四頁）と述べる。なおその例証として宮川氏が挙げておられる沈約の「宋書恩幸傳論」の他に、後漢の建安十八年献帝が曹操に与えた「冊魏公九錫文」に「君研其明哲、思帝所難、官才任賢、羣善必舉」　曹操の人物挙用の功績を称えた文がある。

⑥ 杜佑は次のように記載。「初曹公時、魏府初建、以毛玠崔琰爲東曹掾史、銓衡人物、選用先尚勤儉。於是天下士人、皆砥礪名節、務從約損。」（通典選舉二）

⑦ 曹操が丞相の時の掾属には毛玠・崔琰の他に和洽も居り、この和洽と同郡の若者許混は曹操が己れの人物評を強要した許劭の子であった。彼は魏明帝の時尚書の職に就いているところを見れば、父の血を受け継いでやはり人物評定をしたのであるらしい。

⑧ 李粛の人物評が伺えるのは次の一例。「司空孟仁少從南陽李粛學、其讀書夙夜不懈、粛奇之曰、卿宰相器也。」（呉志孫晧傳注引呉録）

⑨ 「南北朝に於ける社会経済制度」岡崎文夫（弘文堂）「六朝史研究　政治社会篇」宮川尚志（日本学術振興会）「九品官人法の研究　科挙前史」宮崎市定（同朋社）他。

⑩ 中正には王嘉のような中正ばかりではなく、「時苗領其郡中正、定九品、於敍人材不能寛、然紀人之短、雖在久遠、衡之不置。」（魏志常林傳注引魏略）人の才を敍す場合、大目に見ることはしないが短所については胸にしまっておいたという時苗のような中正も居た。

⑪ 山濤は魏元帝の景元中にも吏部郎として選官に当っている。この時竹林の賢友嵇康に対して自分に代って吏部郎に出仕しないかと働きかけたが、嵇康は「與山巨源絶交書」を書いて答えに代えた話は有名である。

⑫ 清姚振宗は「隋書經籍志考證」で、古くは賈弼及び裴津の注した諸本が存在したことを推測している。又厳可均の「全晋文」には世説注・文選注・通典及び類書類から引いた断片が集められている。

⑬ 史曜は魏末晋初の人倫鑒識の人周浚によって見出された。もと微賤の身で未だ衆人の知る所とならざる時、周浚は独り史曜を友とし自分の妹を妻合わせたため世間で名を知られるようになった。（藝文類聚四十八引曹嘉之晉紀）

⑭ 最後の「貴之」は「全晋文」によって補う。

⑮ 『山公啓事』の原来の姿はいかなるものであったか。「全晋文」はこの『世説』政事注に引く嵇紹に関する『山公啓事』の内容として、「詔選……濤薦曰」の経過説明の八字及び「詔曰…」の詔の言葉十五字を削り山濤の人物評言のみを載せている。しかし一方では郭奕・王済に関する『山公啓事』の内容として『御覧』二百十九を引いて、「詔侍中缺…」の経過説明文及びそれに対する夫子の詔の言葉をもその内容として載せている。厳

可均の採録上の判断に混乱が見られる。『山公啓事』についてはまた稿を改めて言及したい。

⑯ 山濤の『山公啓事』の人物評には、「秉德尚義、克己復禮」「體義正直」（羊祜評）「忠德有智意」（蘇愉評）の如く魏朝草創期の人物評と同様儒教的な古来の表現も見られる。これはやはり西晉初の国家がかような人物を必要としていたからである。このことは諸郡の中正に淹滯の士を挙げさせた武帝の令が証明しよう。「令諸郡中正以六條舉淹滯、一曰忠恪匪躬、二曰孝敬盡禮、三曰友于兄弟、四曰潔身勞謙、五曰信義可復、六曰學以爲己。」（晉書武帝紀）

⑰ 「支那文学思想史」外篇清談　青木正児　「魏晉時代における人間の発見」森三樹三郎（東洋文化の問題一号　昭和24年）「中国思想通史」第三巻第二章魏晉南北朝思想的性格与相貌　第三章正始之音与清談源流

⑱ 森三樹三郎「六朝士大夫の精神」（大阪大学文学部　昭和29年）八・九頁に言及。

⑲ 瓦官寺は『世説』の中でしばしば清談の場として登場する。この瓦官寺について谷口鉄雄氏は『高僧傳』や『建康實録』に記載する瓦官寺と『世説』の中の瓦官寺とは年代的に一致しないことを指摘しておられる。（「顧愷之と瓦官寺」九州大学文学部四十周年記念論文集　昭和41年）

⑳ 清談の中での人物評は東晉の次の例にも伺える。「諸公與時賢共賞説、遏胡兒並在坐。公問李弘度曰、卿家平陽、何如樂令。」（世説品藻）「世論温太眞是過江第二流之高者。時名輩共説人物、第一將盡之間、温常失色。」（同）また当時の遊びの主流は「談論」「文学」「人物評」であったと言えよう。「魏長齊雅有體量、而才學非所經。初宦當出、虞存嘲之曰、與卿約法三章、談者死、文筆者刑、商畧抵罪。」（世説排調）これは才能学問がそれほどでない魏長斉が初めての出仕を控えて、虞存から「談論すれば死刑、文筆をとれば刑に処し、人物品定をすれば罪とするぞ。」とからかわれたもので、当時誰もが遊びとして行っていたことが分る。

㉑ 岡村繁「後漢末期の評論的気風について」二五頁に言及。

㉒ 『三國志』に注した宋の裴松之の態度にも人物を表現する評語への苦心と関心の高さが見られる。「臣松之案『跱』或作『特』、竊謂『英特』爲是也。」（魏志崔琰傳注）これは崔琰が司馬朗の弟晉宣王（懿）に対して行った人物評「剛斷英跱」への注で「英跱」よりも「英特」ひときわ抜きんでてすぐれているの方がよいと本文の語句を訂正する。『通鑑』はこれをうけて「剛斷英特」にしている。又、「臣松之以本傳不稱彧容貌、故載『典略』與『衡傳』以見之。」（魏志荀彧傳注）荀彧本伝には荀彧の容貌についての説明がないので『典略』と『禰衡傳』を引用して人物がよく分るようにしたというのである。確かに本伝には事跡の記載があるのみで人物の容貌・風格を想像させる言葉は見当らない。裴松之は『典略』の「彧爲人偉美」、『禰衡傳』の「淑質貞亮、英才卓犖」を引いて補っている。陳寿の本史にこうした評語が無いことに気付いて裴松之は欠落感を抱いたのであろう。

㉓ 「当時の若者」、原文は「時流年少」。激動の時代、新しい波が押し寄せる時必ず「貴游子弟・権貴子弟・天下游士・少年貴遊・時流年少・貴勝子弟」がその新風を先取りしている。後漢末の太学生・游士の一大旋風以来彼らの動きは六朝を通じて見られる。「貴游子弟」については次の機会に言及したい。

㉔ 『隋志』に「漢晉春秋」を「漢晉陽秋」と作るのは、東晉の世簡文帝の鄭后の諱である阿春を避けたため。（姚振宗　隋書經籍志考證）

㉕ 「時人目・時人謂・時論・時人以爲・時謂・時人道・時人欲題目・時人共論・時人號・時人云」といった「時人」の評は、後漢末に見られる「謠言・風謠・童謠」のような郷人・百姓・民間・児童にまでその広がりの範囲を持ったものではなく、名士のサロンに出入りするとりまき貴族或はその貴游子弟までの範囲である。

（昭和五十六年九月二十八日受理）

（宇部工業高等専門学校国語教室）